

子どもの笑顔と未来のために

日本大学危機管理学部教授 鈴木秀洋

日本の子どもたちは果たして今、幸福なのか。私は長らく日本の行政現場で子ども施策の法制度設計に関わり、個別の相談対応をも担ってきた。幸福度が低く、自殺率も先進国の中で特別に高い。不登校、いじめ、虐待等の認知件数等も減少しない。こうした日本の子どもを巡る環境改善を模索し続ける中で、フルインクルーシブの旗を上げ続ける国、イタリアを訪ねたくなった。

「共助の国」の実践

『子どもの人権を守るイタリアのフルインクルーシブ教育』は、子どもの人権保障の観点から日伊の制度・運用の比較を行っている。日本と同じ点や相違点を抽出し、徹底した文献調査と現地視察とヒアリングにより分析した。ありがちな海外札沓や視察報告書とは異なる。日本の教育・保育の優れた取り組み（施設等）は十分知り理解している。それでも取り入れ、改善す

べき制度、根拠・理論、実践部分を多面的に検証した学術書である。学習指導要領改訂の今、教育・福祉・保健部局のみでなく、議会や審議会、現場での論点整理と方向性の確認の土台となるべく執筆した。

本書では、まず伊のインクルーシブ教育・保育の特徴を五つ挙げる。第一に、法律・制度による政策実現という特徴である。日本と同じとの指摘が想定されるが、根本規範である伊憲法や法律の文言の詳述度・解像度は、抽象的で広範な裁量に委ねられる。日本の法律文言と比較してみると、より具体的に、指針として明確である。

第二に、具体的なインクルージョンを支える体制・中身として、①学校・保育制度②個別教育計画（PEI）の作成・利用の実際③学級編成の在り方・運用④

チーム教育体制（担任教師、支援教師、エデュケーター、アシスタント等のチーム体制や地域保健機構との連携）⑤専門性の重視——等に特徴がある。第三に、子ども・保護者参画の徹底である。当事者として主体的な選択権の行使が保障されている。第四に、地域性（地域とのつながり・密着度・交流等）の重視である。地域と学校が、子どもの発達という時間軸（例えば小中の一体化や就業面まで）と物理的空間軸（医療・福祉・教育施設等の一体化等）の両面で一體的である。

第五に、官民協働である。伊では、社会的協同組合という社会システムの構築により、教育・保育（公共財）を公共的民が制度的に下支えている。共助の国といえる。小学校等の現場視察では、障害の有無により分離されない環境下で子どもたちが学ぶ。教員以外の福祉・保健等の支援者が教室に複数いて、授業を主従・上下関係なく担っている。子どもも大人も主体的に語り、動く。確かに、日本でも同様の活気ある現場を多く見てきた。一部の伊の学校視察で判断してはなるまい。しかし、理念と連続的な現場に「わくわく」した。多様な職種（支援者らと子ども、子ども同士）のつながりの実態に目を凝らす。①障害がある子がどの子かわからない、差別が生じない授業展開②音楽や美術、探索・創造型授業や教室外活動の多層・多様性（刺激と配慮）——の工夫は日本の好事例にぜひ加えたい。

日本の現在の教育・保育を肯定する立場から反論もあろう。①伊の法制度の優位性に対する反論（国際的に早い段階から排除・分離・挿入から統合として包摂の段階に至った伊に対する当初混乱を強調する見解含む）②日本のインクルーシブ教育システム肯定論（国調圧力の強さとの比較）や連動性に対する日本の回答、分離策は保護者の望みとの見解含む）③学習進度が早いまたは遅い児童・生徒の教育・保育を受ける権利を保障する立場からの反論（発達保障論VS権利保障論の対立含む）④インクルージョンの到達点が不明確であるとの反論——などである。こうした論点にも詳細な検討を行っている。

筆者の最新刊 『子どもの人権を守る イタリアのフルインクルーシブ教育』 法整備と文献調査および現地視察から 鈴木秀洋 著 日本大学出版 2026年05月22日 006面 01版 No.01